

【旧約聖書日課】創世記 28章10～22節

¹⁰ヤコブはベエル・シェバを立ててハラシムへ向かった。¹¹とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。¹²すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。¹³見よ、主が傍らに立って言われた。

「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。¹⁴あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。¹⁵見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

¹⁶ヤコブは眠りから覚めて言った。「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」¹⁷そして、恐れおののいて言った。「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」

¹⁸ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、¹⁹その場所をベテル（神の家）と名付けた。ちなみに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた。²⁰ヤコブはまた、誓願を立てて言った。

「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、²¹無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、²²わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」

【使徒書日課】使徒言行録 7章44～50節

⁴⁴わたしたちの先祖には、荒野に証しの幕屋がありました。これは、見たままの形に造るようにとモーセに言われた方のお命じになったとおりのものでした。⁴⁵この幕屋は、それを受け継いだ先祖たちが、ヨシヤに導かれ、目の前から神が追い払ってくださった異邦人の土地を占領するとき、運び込んだもので、ダビデの時代までそこにありました。⁴⁶ダビデは神の御心に適い、ヤコブの家のために神の住まいが欲しいと願っていましたが、⁴⁷神のために家を建てたのはソロモンでした。⁴⁸けれども、いと高さ方は人の手で造ったようなものにはお住みになりません。これは、預言者も言っているとおりです。

⁴⁹『主は言われる。

「天はわたしの王座、地はわたしの足台。

お前たちは、わたしにどんな家を建ててくれると言うのか。

わたしの憩う場所はどこにあるのか。

⁵⁰これらはすべて、わたしの手が造ったものではないか。」

【福音書日課】マタイによる福音書 21章12～16節

¹²それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、西替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。¹³そして言われた。

「こう書いてある。

『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』

ところが、あなたたちは、それを強盗の巣にしている。」

¹⁴境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた。¹⁵他方、祭司長たちや、律法学者たちは、イエスがなされた不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、「ダビデの子にホサナ」と言うのを聞いて腹を立て、¹⁶イエスに言った。「子供たちが何と言っているか、聞こえるか。」イエスは言われた。

「聞こえる。あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉をまだ読んだことがないのか。」

宮きよめ

今日、与えられた聖書日課には、「新しい神殿」という主題が掲げられています。マタイの箇所には「神殿から商人を追い出す」という見出しがつけられています。ながく聖書に親しんでおられる方々は、宮きよめの出来事として覚えておられるかと思います。イエスさまが、人々から「**ダビデの子にホサナ**」と迎えられ、エルサレム入城した後の記事です。柔和な方として、子ロバにのってエルサレム入城されたイエスさまでしたが、その後、イエスさまは神殿に入り、そこで商売している人の腰掛をひっくり返し、またそこで買い物している人々をも皆追い出すという、激しく荒々しい姿をお示しになりました。あの優しいイエスさまが？と思われるかもしれません。イエスさまも、私たちと同じように食事をし、疲れれば眠り、友のために泣き、人としてこの地上を歩まれたと思えば、柔和なお姿もあり、激しいお姿もあるのです。けれども、できれば優しいイエス様の話だけを聞いていたい、聖画に描かれるような神々しい主イエスのお姿だけ拝見していたらいい、そんな思いを内心いただくのは私だけでしょうか。心のどこかで、自分に都合のいいイエス様だけを求めてしまうことが、私たちの中にはあるのではないのでしょうか。ここでのイエスさまは、まさにそのような人々、自分たちにとって都合よく神殿を利用する人々を激しく追い出します。できれば、読み飛ばしてしまいたいような激しいイエスさまのお姿を、聖書は今日ここに示しています。

イエスさまが神殿の境内に入ると、そこでは、礼拝に来る人々相手に犠牲の鳩などを売る商人や、そこで買い物をする巡礼者がいました。当時、神殿で礼拝するためには、動物の犠牲が当たり前でした。旧約の律法には犠牲についての細かい約束事が書かれています。犠牲にささげられる動物は、羊や山羊や鳩でした。しかし、それは無傷でなければならぬ等、こまかな決まりがあったため、神殿にやってきた人々は、神殿の境内で売られている犠牲のための動物を買って、それをささげるのが通常でした。また、神殿でささげられる献金や神殿税には、日常には使われていないシェケルという貨幣でなければならなかったそうです。そのため、人々は神殿の境内で行われている両替所でそれぞれ両替しなければなりません。イエスさまがご覧になった風景は、何も特別なことではなく、神殿で日常茶飯事に行われている風景だったのです。全国津々浦々から巡礼に来た人々が、境内で犠牲の動物を買って、両替をする。売る人も買う人も、どちらも神殿礼拝のための必要なこととして行っていました。けれども、イエスさまは売り買いしている人々を皆追い出し、商人の店をひっくり返しました。その場に居合わせた人々はさぞかし驚いたことでしょう。この前日に、ガリラヤからエルサレムに来たばかりのイエスさまが、日常的に行われていた売り買いを批判したところでどうなるというのでしょうか。神殿で毎日、商いをしていた人々にとっては、イエスさまもまた、地方から来た巡礼者の一人にすぎないのです。仲間といっても、十数人の弟子たちしかいない一人の男の言動です。人々はイエスさまが何をなさろうとしているのか、イエスさまのなさることを理解できず、ただただ驚き、イエスさまへの反発を強めただけだったと思われる。イエスさまは仰いました。

「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちはそれを強盗の業にしている」。イザヤ書 56 章の御言葉を引用して、イエスさまは激しくこの光景を非難なさったのです。

自分にとって都合のいいイエス様だけを見ていたい。耳障りのいい聖書の言葉だけ聞けたらいい。私たちのそんな自分勝手な心を激しく覆すイエス様。これが私たちの日常の風景だからと開き直って、漫然と過ごす信仰者に、「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである」と真の礼拝者としての在り方を問うイエスさま。こんな激しいイエスさまはできれば、引っ込んでいて欲しい、優しいイエス様だけで十分だとイエスさまを拒む私たちの心こそ、御子を拒み、十字架に磔にした当時のユダヤの人々の罪の心と何らかわりがありません。現代にあってもなお御子を拒み、イエスさまはお飾りのように十字架に居てくれたらいいのだという、イエスさまの真実を拒む罪です。私たちのその思いは、エルサレムで、神殿礼拝での便宜を図って、お互いに良い事をしていると思って日々過ごしていた人々——犠牲の動物を売っている人々や、それを買い求める巡礼者と何ら変わらない。私たちの無自覚に礼拝をささげている姿こそ、主イエス様にひっくり返されなければ分からないことであり、そこまで激しく問われなければ理解できない漫然と居座る罪の姿なのです。

自覚的な礼拝者へ変えられて

旧約聖書日課は有名なヤコブの夢の箇所です。兄弟のいさかいから逃げるように故郷を追われたヤコブは、とある場所に来た時に野宿をします。そこでヤコブは夢を見ます。そこには、天と地を結ぶ階段があり、その上を天使たちが上り下りしている夢を見るのです。ヤコブは、そこでヤコブを祝福し、守り、決して見捨てないという神の声を聴きます。ヤコブは眠りからさめて言います。「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった」。そこが神の家であること、神と人をつなぐ天の門であることをヤコブは知らなかったのです。アブラハム、イサクに次ぐ者として生まれ育ったヤコブが、神から決して見捨てられることなく、守られ、その祝福にあずかっていること、それを知らなかったと告白するのです。家の宗教として神を礼拝することは知っていても、それまで無自覚に歩んできたヤコブが、家族の問題を抱え、家を追われて逃げて行った先で、本当の意味で神と出会い、そこで自覚的に礼拝するものと変えられたのが、この夢における神様からの示しでした。ヤコブが夢で神のみ言葉を聞き、悔い改めてまことの礼拝者として変えられていったように、イエスさまもまた、神殿で犠牲をささげる人々に、自分たちの都合のいいように礼拝する者としてではなく、悔い改めて、真剣に自覚的な礼拝者となるようにとお示しになります。

イエスさまが神殿でこのような手荒とも思える宮きよめをなさり、売る人だけでなく、買う人までも追い出したとき、主の周りに集まってきたのは、心から主イエスを求める目の見えない人や足の不自由な人たちでした。彼らは、その病や障害のゆえに、神殿に入ることを許されていない人々でした。イエスさまが売り買いをしていた人々を追い出した時、そこには誰もいなくなったのではありませ

ん。きよめられたその所に、真剣に神を求める人々が近寄ってきたのです。当時は宗教的にきよくないとされていた人々です。イエスさまは彼らをお癒しになりました。そして、その様子を見た境内で遊ぶ子どもたちは、「**グビデの子にホサナ**」と叫んでイエスさまを賛美しました。それまで礼拝と関係なく過ごしていた人々、ふさわしくないとされていた人々が、さらに子どもたちまでもが、主イエスを慕い求め、主の御もとにあつまり、主を賛美したのです。

伝道する礼拝者とされて

本当ならば、私たちこそが神殿から追い出されるべき存在であり、主の御前に進み出るにはふさわしくない者なのです。真の礼拝者としてふさわしくないと、これまでの在り方を主ご自身によってひっくり返されるのは、他でもない私たちなのです。それまで脈々と続いてきた神殿で犠牲の動物をささげる礼拝から、ただ一度きり、主イエスご自身が十字架の犠牲になってくださり、もはや動物のいけにえは必要ないとその身をもって示してくださった。私たちの罪を背負ってイエスさまご自身が犠牲となって死んでくださった。このただ一度きりの御子イエスさまの十字架の犠牲、十字架の贖いがあるから、私たちは罪をきよめられて御前に進み出ることが赦されているのです。私たちが毎週交読文として唱える悔い改めの詩編にあるように、神さまが求めるのは、動物の犠牲、焼き尽くす捧げものではなく、打ち砕かれた魂、悔い改めの心なのです。御前に進むにはふさわしくないような私たちでさえ、主イエスさまの尊い犠牲によってきよめられ、そして悔い改め、心から主を慕う者に作り変えられたいと切に願うものです。

第二コリントの 6 章に「**わたしたちは生ける神の神殿なのです**」という御言葉があります。私たち一人一人が主の日ごとに神の息を吹き込まれ、新たにされた「**生ける神の神殿**」として、この礼拝の場所から、それぞれの場所へと押し出されます。そこでまたキリストを証しする器として、一週間の歩みを主イエスと共に歩むのです。まことの礼拝者は、その存在だけで伝道者とされていきます。伝道者というと、そんなことはできないと思われる方もおられるかもしれませんが。いえいえ、私たちが真心をもって、礼拝すること、それがまだ神を知らずに過ごしている人々への伝道、証しとなるのです。

使徒書日課のステファノの説教には、「**わたしたちには荒れ野に証しの幕屋がありました**」とモーセ時代の礼拝所のことが書かれています。礼拝のための幕屋は、証しの幕屋なのです。礼拝することを「礼拝を受ける」と表現される方がおられますが、私は少し違和感をもって聞いています。礼拝から受ける恵みは確かにたくさんありますが、受け身の礼拝者という印象があるからです。もはや動物の犠牲をささげることはなくなりましたが、礼拝は積極的にささげるもの、私たち自身の悔い改めた魂を御前にささげるのです。そのことが同時に、隣人への証しとして用いられる。私たち一人一人が、伝道していく礼拝者とされるのです。伝道者と聞いて何も気負いすることはありません。なぜなら私たちがすでにキリストに背負われているからです。